

あ と が き

- 24) S. Smith : Early History of Assyria, London 1928, p. 93.
- 25) ITT, I =Thureau-Dangin : Inventaire des Tablettes de Tello, Tome I, Textes de l'époque d'Agadé, Paris 1910.
- 26) Hackman=G. G. Hackman : Sumerian and Akkadian Administrative Texts, New Haven (Yale Univ. Press) 1958. 数字は手写文書の番号。
- 27) duru₇にはアッカド語の *kapru* “村落”の意味がある。É-A と2字で書かれている。Duru₇-šabra^{ki}は “šabraの村の地”の意。šabraは職名で、アッカド時代からウル第3王朝時代には宮殿や神殿の重職で ensíやsanguの代理を務め、主として経済・行政部門の事務の責任者となっている。おそらくこれは “šabraの荘園の地”, “šabraの所領地”の意とも解される。duru₇-šabra^{ki}に対応する duru₇-ensí-ka^{ki} “エンシの荘園の地”なる表現も見られる(ITT, I, 1182, R. 4)。“都市周辺の地”を意味する uru-bar-raもアッカド語で *kap-ru* “村”と訳されている。uru-bar-raは都会に対する田舎の一般の名称のように考えられる。
- 28) Thureau-Dangin : Recueil de Tablettes Chaldéennes, Paris 1903, p. 162. 以下 RTC と略記。
- 29) RTC, p. 161.
- 30) S. N. Kramer : Cultural Anthropology and Cuneiform Documents, *Ethnology* Vol. I, No. 3, 1962, pp. 301-2.
- 31) C. J. Gadd : The Cities of Babylonia, *Cambridge Ancient History* Vol. I, Chap. XIII, Cambridge 1962, p.24.
- 32) C. H. Kraeling and R.M. Adams : City Invincible, Chicago 1960, pp. 183-4.
- (本研究は、昭和37年度文部省科学研究費による研究の一部であることを附記する)

あ と が き

○本号は副会長であった中原与茂九郎教授の退官記念号。杉勇教授も高諾されシュメール・アッシリア学特集を企画してきたが同教授の玉稿が頂けず、伊藤氏にいそぎ執筆を煩わした。幸い東都学界からは板倉勝正教授の玉稿をえて巻頭を飾りえたのは望外の光栄、また中原教授には進んで論稿を寄せられ、ほか諸氏の高論卓説、いずれも本邦古代オリエント学の精華ならぬはなく、また「古代オリエント研究特集」と銘打つ本格的な編集も本誌をもって本邦最初のものとして自負したい。○彙報欄記載の如く中原教授からは多額の基金が寄せられた。感謝の意は本誌の充実にもこめて一路前進したい。“路は一つ——真実のそれであり、ほかのはみな路でない。”(ヤスナ 72₁₁) その真実一路とは学術誌としての本誌の内容充実であるともわれらは言いたい。本号は行掛かり上従来のスタッフで事に当たったが、こんど副会長に織田武雄教授、編集長に羽田明教授を迎え、足利会長以下陣容一段と強化、躍進の気みなぎる本会である。○しかし本誌も活版印刷となってから前号まですでに4号、毎号足利会長から容易ならぬ助成を仰いできた。会員倍加を要請する編集部之苦衷と賢察の上今後ともよろしく願いたい。○本号も印刷はあばろん社社主伊藤武夫氏を煩わしたが、面倒な活字の新鑄にも協力され感謝にたえない。

[編集部記]